

柴松岩論治中医調整反复移植失敗方案

妊娠と出産は、従来女性の一生の中に重要な事となる。排卵誘発方法出るまで、女性は妊娠の為、各地の名医を訪ね、使える薬全部使って、巫術でもやった。現在、体外受精 (IVF-ET) など生殖補助医療技術のお陰で、たくさんの方が念願の妊娠出産を叶うようになった。一方、IVF-ET の反復着床失敗 (RIF) 例も多く、女性の体また精神的に大きな負担となる。ここでは柴老先生の養血蓄精法治療 RIF の方法を検討する。

論理法

RIF の発生、卵子の質及び内膜の状態と深い関係ある。《女科経論・種子篇》の“一曰挾地，二曰養種……腴地也不發瘠種，而大粒亦不长礪地”によって柴松岩教授は“育種論”を作った。目的として、養種育珠により卵子の質を上げ、養血挾地により子宮内膜状態を改善、最終的に IVF-ET 成功率を高める。

養種育珠、まずは優良な卵胞を募集する。婦人が最後まで妊娠できるか卵子の質による決定される。生理前、卵巣の中に卵胞の募集が始め、血海と冲任の気を加えて育てて優良な卵胞を培養する。生理時古い瘀血除去の後新鮮な内膜作り始めた。この時左右の卵巣にそれぞれ六七個くらい卵胞を募集された。募集時、刺激が弱すぎると卵巣機能も弱まって、優良な卵胞の選択募集から随意選択に変わる、たとえ血海、冲任の気たっぷり与えても、優良な卵胞募集できない。一方、刺激強すぎると卵巣中の予備卵胞全部出て、優良な卵胞の選択募集もできなくなる。それに伴う卵胞の質悪くなる同時に卵巣も障害される可能性ある。

養種育珠、その次は卵巣の天癸の精を充盈させる。卵胞また受精卵の質は卵巣の予備の強弱に決定され、卵巣精気の良さは天癸の盛衰に決定される。益腎精と補益五臓で卵巣を潤養することより卵巣機能を回復させ、消耗を防ぐ事が重要となる。滋養天癸は女子の年齢で決定する。研究証明：年齢上がる事につれ卵巣の予備落ち、反応低下、卵胞の質も落ちる。また、年齢上がる事で子宮内膜受容性も落ちる。古人語：“女子以七为度，满七则形变；凡人则以十为变，满十则脏衰”。女子 35 歳から“陽明脈衰”，必ず通健の薬を使って陽明を潤養する；女子 40 歳から“腠理始疏”，必ず固表の薬を使って腠理を滋養する；女子 42 歳から“三陽脈衰”，必ず温陽の薬を使って助陽によりアンチエイジングする。

養血挾地、まずは子宮内膜を調養する。着床できるか子宮内膜の受容性により決定される。子宮内膜は陰陽気血と関連あり、陰精充裕なら内膜も増殖できる、陽気暢痛なら血脈も通暢する；気機調和（陰陽調和）なら氤氳（排卵）行い、血海充養なら子宮内膜に物受容しやすい（着床しやすい）、その逆に、病変が出てくる。例えば、陰盛則寒凝，陽盛則扰神（心神不安），陰虚則内膜薄，陽虚則血滞；気虚則血痿（血虚），血瘀則脈閉。陰平陽秘、気血和暢であれば、子宮と内膜共に潤養することが出来る。

養血挾地、その次は育嬰安胎。安胎の選択は夫妻の体質及び現在の状態と関係深く、個人差によってそれぞれ対応する。移植初期、受精卵まだ完全に着床できず、母体普段貧血体質で内膜薄く、過労また清利動血薬で流産しやすいので、移植初期は安静が大事。普段母体虚

弱体質、また男子の精気欠乏の場合、着床後、胎児の生長に必要な気（栄養）がまだ足りていないため、純陰純陽の薬を与えることが必要。着床後滋養が大事。以上のことから、静（安静）と養（滋養）は移植後の調養穩胎重要な方法となる。

論用薬

一般的に卵胞の募集は前周期の黄体期及び本周期の卵胞期早期から始め、この時期は第1回選択段階となる。この時期卵胞刺激ホルモン（FSH）一時的に上昇、顆粒細胞にあるFSH受容体と結合し、卵胞の発育を促進する。一方、FSHある程度の量まで増加しないと卵胞の発育には反応がない。原始卵胞の活性化、二次卵胞へ発育の促進、FSH及び関連因子の増加により沢山卵胞が募集できる。その時期に中医薬治療を加えると募集された卵胞の質と量共にアップできる。卵胞の募集方法3つある：1、動陽；2、活血；3、開郁。中医の弁証として、陽虚、血瘀と肝鬱である。陽虚の患者に菟丝子が第一選択となる。《本経逢原》云：“菟丝子其性偏助阳，其功专于益肾精”，《神农本草经》云：“菟丝子主续绝伤，补不足，益气力，肥健”。卵巣の養うに菟丝子が最適。血瘀証の患者に川芎が第一選択となる。《神农本草经》云：“川芎主妇人血闭无子”，《本草汇言》云：“川芎味辛性阳，气善走窜而无阴凝粘滞之态，虽入血分，又能去一切风，调一切气”。川芎の養血活血は卵胞の募集に最適。肝鬱証の患者に月季花が第一選択となる。《本経逢原》云：“月季花，月之开放，不失经行常度，虽云取义，亦活血之力也”，柴先生は“月季花，引月信以月为期也”と考えた。疏肝調経で血海充実、生理順調なるように月季花が一番適応。

卵胞の発育：募集された卵胞の中、FSH最低閾値に耐えられる卵胞が主席卵胞に選べ、成熟卵胞へと成長する。FSH閾値を超える時、適当なFSH量が受容体を調整できる。閾値10%～30%以上FSH量を増やせば卵胞発育できる。ただし、大量なFSHは卵胞の発育に影響し、反応鈍く質悪い卵胞が成長させ、染色体異変起こしやすい。中薬の応用で卵胞の質上がって受精卵の質もアップできる。この時期の卵胞発育促進方法は天癸盈缺によって決まる。天癸欠乏者、月経遅れか月経周期3週間未満か月経量少なく色淡暗；随伴症状として太くて虚弱、或は細くて虚弱。天癸欠乏な女子は月経と体質によって3か月間の潤養が必要。肝血の異常により月経不順は女貞子を使う。《本草述》載：“女真实，固入血海益血，而和气以上荣……并以淫精于上下，下独髭须为然也，即广嗣方中，多用之矣”；脾失健運により月経不順は茯苓を使う。《名医别录》載：“茯苓开胸腑，调脏气，伐肾邪，长阴，益气力，保神守中”。体形と合わない時弁証論治でよい。35歳以上高齢女子には、補陽明経絡効能持つ白朮を使う。《日华子本草》載：“白朮治五劳七伤，冷气腹胀，补腰膝，消痰”；40歳以上女子に太子参で益気健肺，《饮片新参》載：“太子参补脾肺元气，止汗生津，定虚悸”；42歳以上女子に阿膠珠など血肉もので補陽，《本草述钩元》載：“阿膠可治经水不调无子，并胎前产后诸疾……治妇人胎痛，或胎漏下血，月水不调，阿膠一钱，蛤粉炒成珠……胃弱作呕者，弗烱化服，打碎同蛤粉蒲黄牡蛎粉炒”。阿膠珠は阿膠の補陽益陰効能持つだけでなく、調経固胎に正気傷害しない。太り型或は痩せ型の女子、どちらも臓腑の気欠乏の場合、当帰最適。太り型に当帰が通腑祛瘀できる、痩せ型に当帰が補血益気できる，《本草正》載：“当归佐之以补则补，

故能养营养血，补气生精，安五脏，强形体，益神志，凡有形虚损之病，无所不宜，佐之以攻则通，故能祛痛通便，利筋骨，治拘挛、瘫痪、燥、涩等证”。女子天癸正常、陰陽不和なければ、平和な薬で排卵を促す、その後安胎のため、時期と問わず潤養薬を使う。続断、香附よく使われる。《日华子本草》曰：“续断助气，调血脉，补五劳七伤，妇人产前后一切病，胎漏，子宫冷”。《滇南本草》曰：“香附调血中之气，开郁，宽中”。この二つの生薬を併用は“续香”と呼ばれ、後継ぎの意味となる。

受精卵の着床成功は受精卵の質だけではなく、良好な子宮内環境及び子宮内膜の受容性も重要な決定因子と考えられる。子宮内膜受容性の増強は着床率と妊娠率の上昇に非常に重要な事と考えられる。調養子宮内膜に調和陰陽、暢通気血がメインとなる。補陰には玉竹よく使われる，《广西中药志》述：“玉竹养阴清肺润燥”。補陽には杜仲よく使われる，《本草正》述：“杜仲暖子宫，安胎气”。補気には甘草よく使われる，《本草汇言》述：“甘草，和中益气，补虚解毒之药也”。養血化瘀には茜草よく使われる，《医林纂要》述：“茜草，色赤入血分，泻肝则血藏不瘀，补心则血用而能行，收散则用而不费，故能剂血气之平，止妄行之血而祛瘀通经”。この四つの生薬は女性の気血陰陽また処方の組み合わせにより加減し、最終的に体が陰平陽秘の状態になり、気血和暢、子宮内膜均一に潤養できる。

強い排卵誘発剤を使う時卵胞ホルモンのバランスが乱れしやすく、高レベルの卵胞ホルモンは黄体ホルモンの生長を抑制する。また、多くの RIF 患者は精神的に緊張、落ち込み、憂鬱、恐怖、悲しみなど各種不良な精神的な刺激で神経内分泌系影響を受け、体内環境を変えるにより受精卵の正常発育に影響する。黄体ホルモンを補助ため、滋腎安胎清心除烦効能ある生薬を投与すると受精卵の生長発育に助けるとなる。寧静潤養により容嬰安胎する。平燥寧静には黄芩よく使われる，《滇南本草》云：“黄芩调经清热，胎有火热不安，清胎热”。除烦寧静には苎麻根よく使われる，《日华子本草》云：“苎麻根治胎漏下血，产前后心烦闷”。止嘔寧静に竹茹よく使われる，《本草纲目》云：“竹茹可治伤寒劳复，妇人胎动”。夫婦とも虚弱体質なら、妊娠中砂仁で健脾潤養できる。《本草汇言》云：“砂仁辛香而散，温而不烈，利而不削，和而不争，通畅三焦，温行六腑，暖肺醒脾，养胃养肾，舒达肝胆不顺不平之气，所以善安胎也”。補腎潤養なら、覆盆子よく使われる，《神农本草经》云：“覆盆子主安五脏，益精气，长阴令坚，强志倍力，有子”。静と養は着床安胎を助ける。

柴先生の治療で大勢の人が出産できて、夢を叶えた。ここで柴先生の経験を紹介し、実際に臨床で参考になれば幸いです。